

平城宮・京出土の植物質遺物

—第184次・第198次B区・第440次他

1 はじめに

平城宮・京跡の発掘調査では、木簡の削屑等の微細な遺物を回収するために、整理室での土壤水洗をおこなっている。本稿ではこれまでに土壤水洗等で回収された植物質遺物について、人為的な痕跡が残り、古代におけるものづくりの一端を示す資料と考えられるものを抽出し報告する。対象とするのは、層位的に奈良時代のものと確定できる竹および樺皮である。これらの概要について報告し、その位置づけをおこないたい。

2 資料の概要 一竹一

竹は、節を持ち、中空状の構造を持つ。報告するにあたり7点の徒手切片法による種同定をおこなったところ、ほとんどの個体がマダケもしくはハチクという結果となった¹⁾。以下に資料の概要を記す。

図289-1は、長20.5cm、復元径約2.7cmで、2輪状の節を持つ。下端には節から約2cmの位置で刃物で平らに切断した痕跡があり、上端には特に細かな加工痕が残る。潰れているため中の節が抜かれていたかは観察できない。上端の丁寧な加工から、完成品とみることできる。図289-2は上下端ともに切断されている。長8.7cm、残存幅2.5cm。節には円孔が並び特徴的である。図289-3は、大きく捻れている。残存長5.2cm、復元径約2.8cm。下端には刃物で平らに切断した痕跡が残る。2と同じく節に円孔が並ぶ。図289-4は残存長7.3cm。2輪状の節を持つ。節より約1.1cmの位置で1の上端と同様の細かな加工による切断痕がみられる。図289-5は残存長9.2cm、6は残存長8.5cm。両者は接合し、径約2.3cmに復元できる。節は腐食が激しいが、凹凸から2輪状の節であると考えられる。図289-7は残存長6.3cm、復元径約2.7cmで2輪状の節を持つ。下端に切断痕が残る。出土遺構は、1・3～7が平城第440次調査SK19189、2が平城第198次調査B区SD5300である。

図290-1・2は、それぞれ先端が炭化している。図290-1は接合し、同一個体である。最大長7.2cmで2輪状の節を持つ。内面のみ炭化しており、上端の炭化部分

は、弧を描くように加工が施されている。下端は節から約1.5cmの位置で切断されている。図290-2は残存長3.2cmで2輪状の節を持つ。ともに先端にのみ焼跡を持つことから、使用に際し焼けたものと考えられる。出土地点は、1が平城第184次調査SE4497、2が平城第440次調査SK19189である。

3 平城宮・京における竹利用

図289-1～3・7、および図290-1の竹については、節より約1～2cmの位置で切断されている点が共通する。これらは、竹の切断に際し、節を避けて節の直下（もしくは直上）での切断が頻繁におこなわれていたことを示す。竹の切り出し、もしくは竹製品の製作に際しての意図的な加工であると認定できる。

また、径が復元できる図289-1・3・5～7については、それぞれの復元径は約2.3～2.8cmとなる。竹の種に規制されるのかもしれないが、細い径の竹を利用していたといえる。一方で、平城京から出土する木簡には「小竹」「大竹」などの表記があり²⁾、これらの径以外の竹も利用していた可能性がある。

さらに、平城京の二条大路濠状遺構SD5100からは竹材の管理用付札と考えられる木簡が見つかった³⁾。図289-2の竹が出土した濠状遺構SD5300の木屑層からも、竹材管理用と考えられる付札と隼人に関する付札が出土している⁴⁾。平城宮・京で出土している「竹」に関する木簡が二条大路の濠状遺構に集中する点やSD5300において加工された竹が出土していることは、付近で竹製品の加工がおこなわれていたことを示唆している。また付札との共伴関係から、これらの竹は現地に生えていたものではなく、材として管理されていたものである可能性が高いといえる。

図289-2や3にみられる竹の節部分の特徴的な円孔は、根付近の「支柱根」の痕跡の可能性もある。支柱根は地下茎とは別に稈の根元に生えている根で、稈を垂直に立てるための支えの役割がある⁵⁾。特徴的な円孔を支柱根の痕跡ととらえる場合、図289-2が短く切断されているのは、稈の根元は節間が短いためとも考えられる。その場合、これらの竹は支柱根のある状態で平城宮・京内に搬入されたと推測できる。このことは、木簡にみられる竹の単位に「根」があることも整合的である。

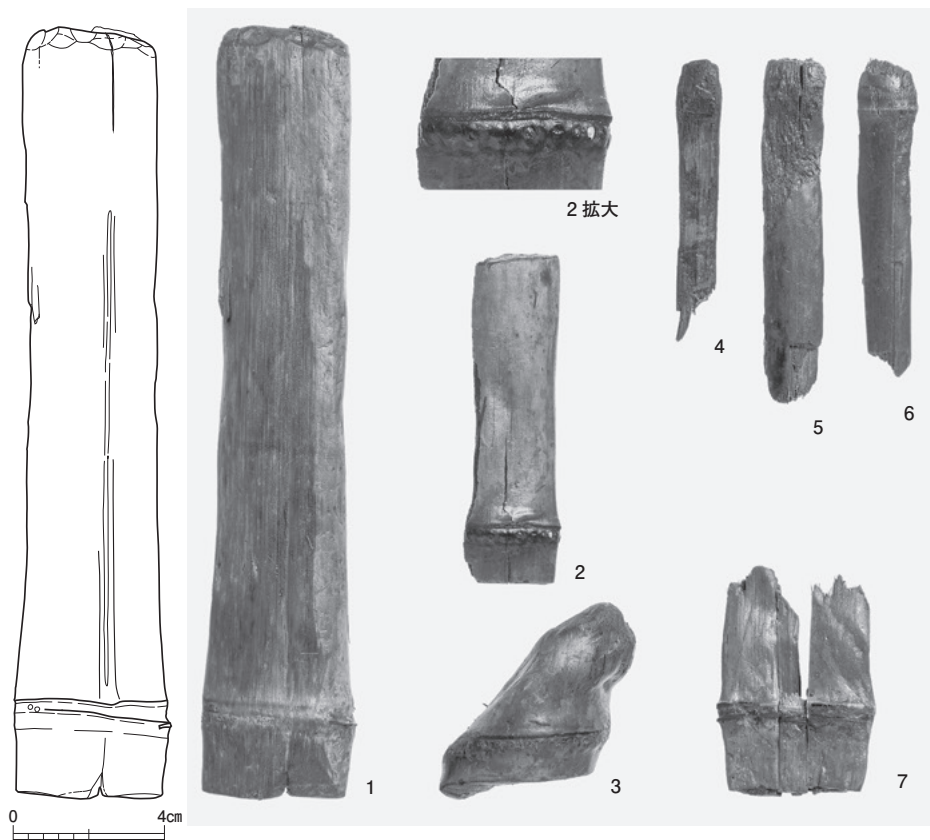
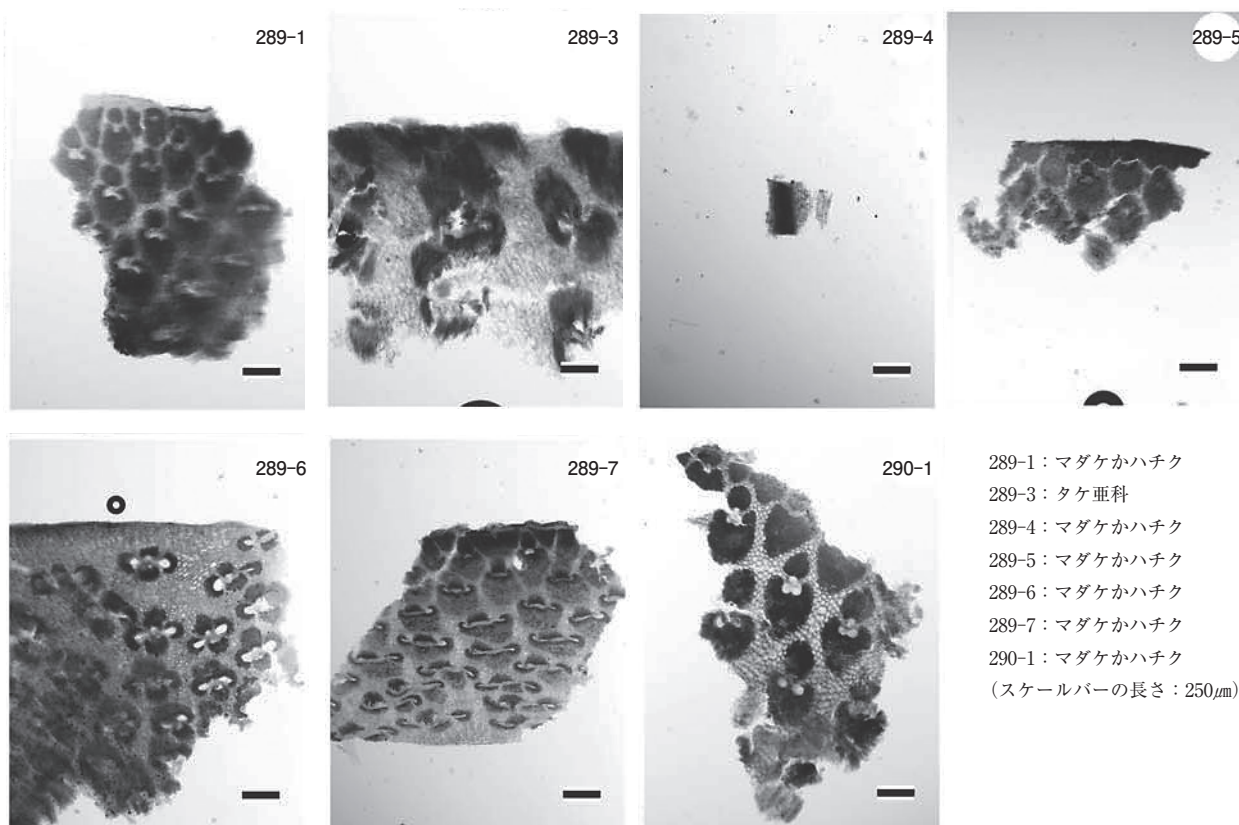


図289 平城宮・京出土竹（実測図は1：2）



図290 竹の燃えさし



289-1：マダケかハチク
289-3：タケ亜科
289-4：マダケかハチク
289-5：マダケかハチク
289-6：マダケかハチク
289-7：マダケかハチク
290-1：マダケかハチク
（スケールバーの長さ：250μm）

図291 出土材の光学顕微鏡写真（横断面）

4 資料の概要 一 樺皮一

樺皮は主に曲物容器の綴じ合わせに用いられ、民俗例などからサクラ樹皮であることが知られている。これまでに平城宮・京跡より数百点の出土があるが、以下では良好な一括資料の例を取り上げ概要を述べる。

第440次調査SK19189 宮内のSK19189は東西約11m×南北約7mの規模の土坑で、現在までに約270点の出土がある。時期は出土木簡から宝亀初年以前である⁶⁾。樹皮には幅5.7cmの幅広のものから幅0.3～0.5cmのものがあり、樹皮素材を紐状に加工している様子が窺える。

第524次調査SD10580 京内のSK10580は条坊側溝の内側にめぐる性格不明の溝もしくは土坑である。時期は出土木簡の内容から奈良時代前半で首皇子に関わる官司が推定されており、漆容器として使用された須恵器平瓶、轆轤残材などの出土から木工にかかわる工房が併設されていた可能性が推測されている⁷⁾。樺皮は約60点出土しており、表面の加工が進んでいない幅3.7cmの幅広のものから幅0.3cmの紐状のものがある。樹皮素材を紐状に加工している様子が窺える。

5 平城宮・京における樺皮利用

出土資料から、主に曲物の綴紐に用いられる樺皮が宮内や京内で樹皮紐に加工されていることが推測できる。文献史料からは宮陶司や大膳職などの官司に所属している工人は曲物を製作していたと考えられており⁸⁾、宮・京内から製作工程のわかる樹皮紐が出土することは、奈良時代においても宮内における曲物製作がおこなわれたことを示唆する。また、木工にかかわる工房の存在が推測される遺構にともなって樹皮紐が出土することは、工房内で曲物製作をおこなっていたことを指摘できる。

6 おわりに

これまでに平城宮・京跡で出土しており、かつ遺構、層位で奈良時代のものであると確定できる植物質遺物について報告をおこなった⁹⁾。竹は初めて材の同定をおこない、竹の加工が平城京内でおこなわれていることを出土資料から示すことができた。さらに、樺皮から平城宮・京内における曲物容器製作を指摘した。今後も資料の蓄積をおこない随時報告をおこなっていきたい。(浦 蓉子)



図292 SK19189出土の樺皮

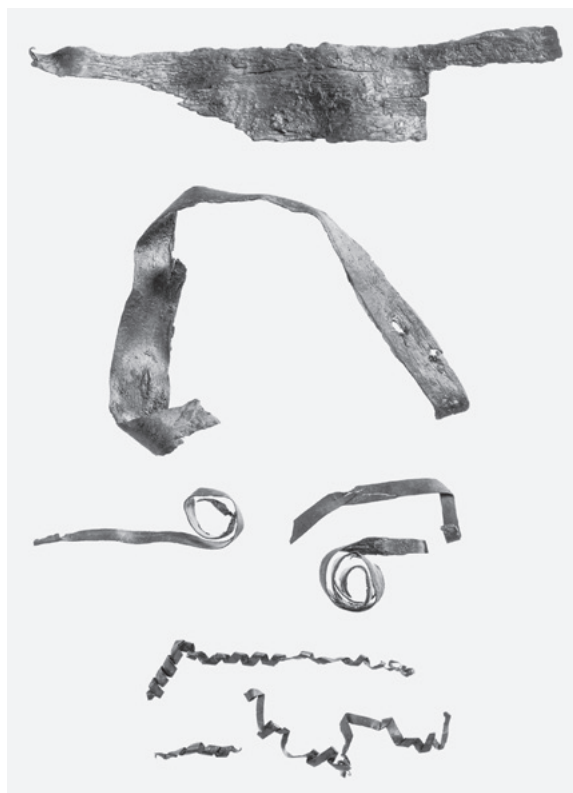


図293 SD10580出土の樺皮

註

- 1) (株)パレオ・ラボ小林克也氏の同定による。端部に欠損等がある部分から切片採取をおこなった。
- 2) 畑中彩子「長屋王邸の「竹」ータケ進上木簡から考える古代のタケの用途ー」『古代文化』第65巻4号2013。
- 3) 前掲註2。
- 4) 『平城木簡概報29』37頁下段459。
- 5) 内村悦三『タケ・ササ図鑑ー種類・特徴・用途』創森社、2005。別種の竹の可能性もある。図289-3は同定には至らなかった。
- 6) 『紀要 2009』、現在も土壌水洗中である。
- 7) 『紀要 2015』。
- 8) 古尾谷知浩「古代の木器生産」『日本史研究』日本史研究会656、2017。
- 9) なお、本報告にはJSPS科研費JP16K16951の成果の一部を利用している。